坪田譲治選★日本の名作

七(なな)いろの童話集

きいろの本

坪田譲治選★日本の名作

七いろの童話集

きいろの本

NDC 913
日本の名作
七いろの童話集
きいろの本
坪田譲治選
1968年
22.2cm
実業之日本社
小学校4〜6年生むき
本文12ポ活字使用

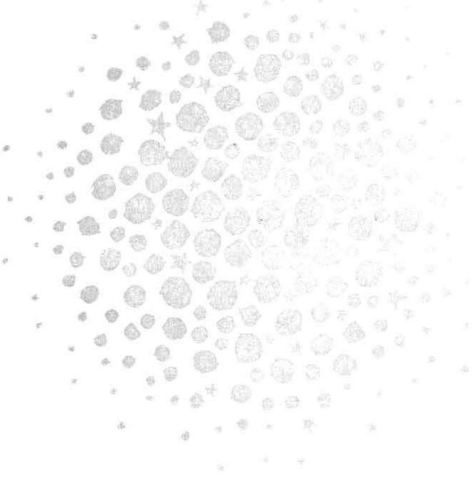
検印省略

定価 680円

日本の名作
七いろの童話集
きいろの本

1968年4月20日　初版発行

編　者　坪田譲治
発行者　増田義彦
発行所　株式会社 実業之日本社
東京都中央区銀座西1—3
TEL (562) 4311　振替 東京326
印刷所　株式会社 東京研文社
編　集　篠遠喜健・佐藤　暁・島津直子
© Jitsugyo no Nihon sha, 1968. Printed in Japan.



本のはじめに

坪田譲治

もう十年もむかしになります。わたしは二、三人の童話作家の友だちと、四国のほうへ旅行しました。松山だの、高松だのというところで、童話についての話をするためであります。おもに、学校の先生方に聞いてもらいました。

ところが、ある町に、童話研究会というのがあって、その会の人たちから、質問がでました。

「わたくしは、子どもに童話を話してきかせる研究をしております。それで、あなた方の書かれた童話を材料にして話をするのですが、どうもおもしろく話せません。ところが、むかし話とか、巌谷小波の作品とか、そういうものを材料にすると、とても、子どもたちによろこばれ、拍手かっさいされるのです。これは、どういうわけでしょうか。できれば、子どもたちに話して、かっさいされるような作品を書いていただけませんでしょうか。まったく、いまごろの童話は、全部といっていいくらい、お話むきでないのです。十にひとつくらいでも、お話むきのやつをおねがいいたします。」

これには、わたしもこまり、いっしょにいった作家の友だちもこまりました。いってみれば、この研究会の人のいうように、いまごろの童話は話すようにできていないのです。むかしのむかし話だの、おとぎばなしだのといわれた童話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は、話すようにできているのです。

たとえば、ラジオかテレビで、講談というのを聞かれたことが、ありましょう。あれは話術、話し方の技術で聞かせる芸なんです。むかし話もおとぎばなしも、むかしはそうだったのです。だから、巌谷小波とか、久留島武彦とか、岸辺福雄とかいわれる、その道の大家があって、日本全国をまわって、子どもたちの大歓迎をうけていました。もとより話もよかったのですが、話す技術がすぐれていました。そのもとの話も話されるようにできていたのです。

以上で、おわかりのこととおもいますが、話すようにできている童話を、説話体といい、読むためにあるのを、描写体といいます。読めばその人が直接目に見るように、耳で聞くように、手でさわるようにできている童話なのです。この本の童話などは、いうまでもありません、その描写体のほうであります。そのつもりで読み、そのつもりで味わってください。

坪田譲治選★日本の名作★七いろの童話集★きいろの本★もくじ

清兵衛とひょうたん……志賀直哉 10
ふきの下の神さま……宇野浩二 22
《詩》雲……山村暮鳥 42
魔法……坪田譲治 44
先生のおはか……秋田雨雀 62
歩いた雪だるま……佐藤義美 76
《詩》今夜はいたちのでそうな晩だ……サトウハチロー 86
手……大蔵宏之 88
月見草と電話兵……鈴木隆 104
《詩》山ぶどう……柴野民三 122

行動半径二百メートル……滑川道夫 124
ノボルとそいつ……山中恒 154
かくまきの歌……杉みき子 162
《詩》ぎんやんまのうた……関根栄一 198
春のくる海……稲垣昌子 200
ある少年の死……高橋健 216
解説——作家とその作品——……水藤春夫 242

★★選者紹介★★

坪田譲治（つぼたじょうじ）

岡山県出身。明治二十三年六月生まれ。早稲田大学卒。日本の児童文学を切りひらいた長老のひとり。『子供の四季』『風の中の子供』『善太と三平』など、小説・童話の名作が数多くある。近年は雑誌『びわの実学校』を主宰、暖かな目で後進の育成に力をそそいでいる。芸術院会員、日本文芸家協会・日本児童文学者協会会員。

編集をてつだった人

水藤春夫
前川康男
今西祐行
大石　真
松谷みよ子
鶴見正夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

坪田譲治選★日本の名作

七(なな)いろの童話集

きいろの本

清兵衛とひょうたん

志賀直哉

これは清兵衛という子どもとひょうたんとの話である。このできごと以来、清兵衛とひょうたんとは、えんがきれてしまったが、まもなく清兵衛にはひょうたんにかわるものができた。それは絵をかくことで、かれはかつてひょうたんに熱中したように、いまはそれに熱中している……。

清兵衛がときどきひょうたんを買ってくることは、両親もしっていた。三、四銭から十五銭ぐらいまでの皮つきのひょうたんを十ほどももっていたろう。かれは、その口をきる

こともたねをだすこともひとりでじょうずにやった。せんも自分でつくった。最初茶しぶでくさみをぬくと、それから父ののみあました酒をたくわえておいて、それでしきりにみがいていた。

まったく清兵衛のこりようははげしかった。ある日かれは、やはりひょうたんのことを考え考え、はま通りを歩いていると、ふと、目にはいったものがある。かれははっとした。それは道ばたにはまを背にして、ズラリとならんだ屋台店のひとつからとびだしてきた、じいさんのはげ頭であった。清兵衛はそれをひょうたんだとおもったのである。

「りっぱなひょうじゃ。」

こうおもいながら、かれはしばらく気がつかずにいた。——気がついて、さすがに自分でおどろいた。そのじいさんはいい色をしたはげ頭をふりたてて、むこうの横町へはいっていった。清兵衛はきゅうにおかしくなって、ひとり大きな声をだしてわらった。たまらなくなってわらいながら、かれは半町ほどかけた。それでもまだわらいはとまらなかった。

これほどのこりようだったから、かれは町を歩いておればこっとう屋でもやお屋でも、あらもの屋でも、だがし屋でも、また専門にそれを売る家でも、およそひょうたんをさげ

た店といえば、かならずそのまえにたってじっと見た。

清兵衛は十二歳で、まだ小学校にかよっている。かれは学校から帰ってくるとほかの子どもともあそばずに、ひとりよく町へひょうたんを見にでかけた。そして、夜は茶の間のすみにあぐらをかいて、ひょうたんの手いれをしていた。手いれがすむと酒をいれて、手ぬぐいでまいて、かんにしまって、それごとこたつへいれて、そしてねた。よく朝は、おきるとすぐかれはかんをあけてみる。ひょうたんのはだはすっかりあせをかいている。かれはあかずそれをながめた。それからていねいに糸をかけて、日のあたるのきへさげ、そして学校へでかけていった。

清兵衛のいる町は、商業地で船つき場で、市にはなっていたが、わりに小さな土地で二十分歩けばほそながい市の、そのながいほうがとおりぬけられるぐらいであった。だから、たとえひょうたんを売る家はかなりおおくあったにしろ、ほとんどまい日それらを見歩いている清兵衛には、おそらくすべてのひょうたんは目をとおされていたろう。

かれは古ひょう（古いひょうたん）にはあまりきょうみをもたなかった。まだ口もきってないような皮つきにきょうみをもっていた。

しかもかれのもっているのは、おおかた、いわゆるひょうたんがたの、わりにへいぼんなかっこうをしたものばかりであった。

「子どもじゃけえ、ひょういうたら、こういうんでなかにゃあ、気にいらんもんと見えるけのう。」

大工をしているかれの父をたずねてきた客が、そばで清兵衛が熱心にそれをみがいているのを見ながら、こういった。かれの父は、

「子どものくせにひょういじりなぞをしおって……。」

と、にがにがしそうにそのほうをかえりみた。

「清公。そんなおもしろうないのばかり、えっと（たくさん）もっとってもあかんぜ。もち

っときばつなんを買わんかいな。」
と、客がいった。清兵衛は、
「こういうがええんじゃ。」
と、こたえてすましていた。
清兵衛の父と客との話は、ひょうたんのことになっていった。
「この春の品評会に参考品ででちょった馬琴のひょうたんというやつは、すばらしいもんじゃったのう。」
と、清兵衛の父がいった。
「えらい大けえひょうじゃったけのう。」
「大けえし、だいぶながかった。」
こんな話をききながら清兵衛は、心でわらっていた。馬琴のひょうというのは、そのときのひょうばんなものであったが、かれはちょっと見ると、——馬琴という人間もなにものだかしらなかったし——すぐくだらないものだとおもってその場をさってしまった。
「あのひょうは、わしにはおもしろうなかった。かさばっとるだけじゃ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com